

# 司馬遼太郎

# 街道をゆく 六十二



街道をゆく  
二十六  
司馬遼太郎

朝日新聞社

昭和六十年十一月三十日 第一刷発行

街道をゆく 二十六

定価 一二〇〇円

著者 司馬遼太郎

発行者 川口信行

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地 五十三十二  
電話 〇三―五四五―〇二三(代表)  
編集・図書編集室 販売・出版販売部  
振替 東京〇―一七三〇

©司馬遼太郎 一九八五年

ISBN4-02-254966-1  
Printed in Japan

街道をゆく

二十六

本書には「週刊朝日」昭和六十年一月二十五日号・連載第六百六十六回から、七月五日号・第六百八十九回分までを収録。

## 目次

嵯峨散歩

水尾の村

水尾と嵯峨原

古代の景観

大悲閣

千鳥ヶ淵

7

23

37

51

65

夢窓と天竜寺

81

豆腐記

95

渡月橋

109

松尾の大神

123

車折神社

139

仙台・石巻

富士と政宗

153

沃土の民

165

神々のこと

179

宮城野と世々の心

195

屋台と魯迅

209

東北大学

223

大崎八幡宮

237

千載古人の心

253

塩と鉄

269

陸奥一宮

288

奥州の古風

297

詩人の儚さ

311

海に入る北上川

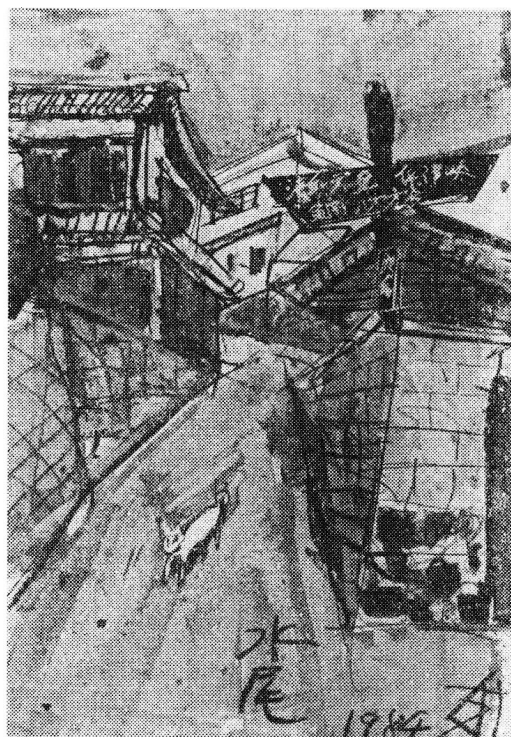
325

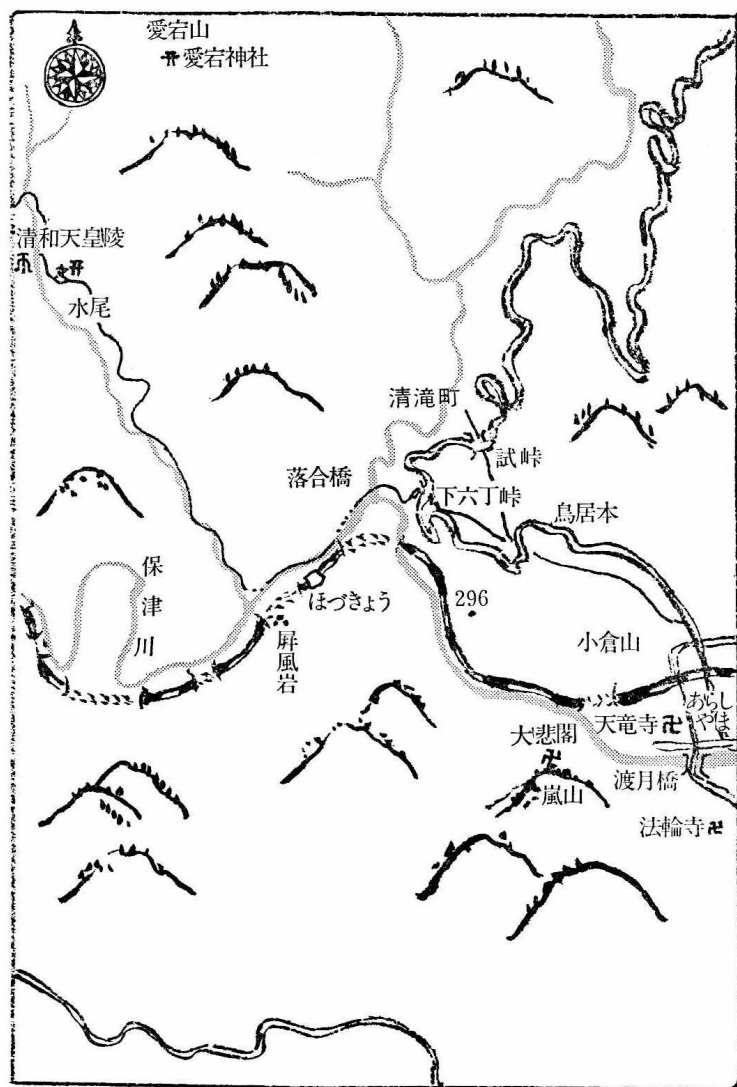
石巻の明るさ

339

題字 棟方志功  
え 須田 剋太  
装幀 原 弘  
地図 熊谷博人

水尾<sup>みずの</sup>  
の<sup>お</sup>  
村  
嵯峨散歩  
一





いちど、京の西郊の嵯峨をゆっくり歩いてみたいと思っていた。

こんど、大げさにいえば素願を果たすことになったのだが、ついでには嵯峨の奥の水尾みずのおの里から歩きはじめることにした。

水尾は山中の村である。古くは、

「絶壑ノ間ニ孤立ス」

などと表現されている。絶壑とは、深く切り立った谷ということだろう。

地図をみると、水尾は、京都市（山城国やましろ）の西辺にあって丹波国との国境くにざかいをなしている愛宕山あたじやま（九二四メートル）の京都側の山腹にある。山腹とはいえ、一つの隆起をなしている。そういう隆起（あるいは稜線）のことを、古い日本語では、

「を（WO）」

といった。ふつう、尾か雄の字を当てる。京都には「を」のつく山地が多い。高雄、榎尾えののお、水尾などである。なかでも水尾がことばとしてもっともうつくしい。水という語がついている以上、はるか眼下に「絶壑」をうがって溪流がながれているのにちがいない。

二十万分の一の地図をみると、愛宕山の丹波高原側の山頂ちかくに水源があつて、急峻を割って細流がながれている。

これを二万五千分の一の地図でみると、川はもはや瀉のような勢いを感じさせる。その細流

が山中で大きくたわんで京都側の山腹に入るが、入ったあたりに水尾というしるしがある。

水尾の里のあたりで、溪谷がややふくらむ。両側の山の斜面がわずかにゆるやかになり、両側の斜面に、段丘水田がつくられている。果樹なども植えられているようである。むろん人も住む。人家は、しらべてみると、三十余戸らしい。

溪流が水尾をすぎると、ふたたび人煙のない山中を走る。やがて屏風岩というあたりで丹波亀岡から流れてくる保津川に合し、なお無人の山中を走りつづけて、ついに嵯峨・嵐山の渡月橋の下に出る。以後、川の名は大堰川にかわり、また桂川になる。

「まず、水尾という所にゆきましよう」

と、出発の前、須田画伯に地図をみせた。

「ええ」

画伯は手をあげたが、目は地図を見ていない。どうせ地球のどこかにゆくのだろうと大らかに思っているらしい。

編集部の藤谷宏樹氏は、綿密な人である。私どもはすでに嵯峨野へゆくことをあらかじめ決めていたので、このひとは嵯峨についての知識を私などより詳細に準備してきている。ところが私が気まぐれに「水尾」と言いだしたので、あらためて地図を見はじめた。やがて顔をあげて、

「鳥居本あたりから山道に入るようですね」

と、いった。

「そこは、後水尾天皇ごみずのおと関係がありますか」

これは、須田画伯である。

「なるほど」

意表をつかれた。後水尾天皇（一五九六～一六八〇）は、江戸初期、反幕的な気分の天皇として知られている。というより、洛北一乗寺に幕府の経費で修学院離宮を造営したひとというほうが通りがいい。この天皇については、熊倉功夫氏に『後水尾院』（朝日評伝選）という好著がある。

後水尾が、どうも、水尾にゆかりがあったとはおもえない。であるのに、諡号しごう（死後のおくり名）がなぜ後水尾とされたのか、よくわからない。熊倉氏の著には「遺勅によって後水尾院とした」と、簡潔にのべられている。

「後」であるというのは、先例として「水尾天皇」が存在した、ということである。正式には存在していない。

はるかなむかしの平安初期の世、清和天皇せいわ（八五〇～八〇）が、通称として水尾御門みずのおのかどとよばれていた。清和はわずか三十一年の天寿しかもたなかったが、幼少で即位したため、十八年在位した。二十七歳でその子に位をゆずり、その後僧になって水尾みずのおにかくれ、ほどなく崩じた。薄命のひとだった。

「わが陵墓をつくるべからず」

というのが、遺詔だったという。釈迦に墓がないように、僧には本来墓がない。僧になった清和が、本気で仏道を行じたことが、この遺詔でもわかる。

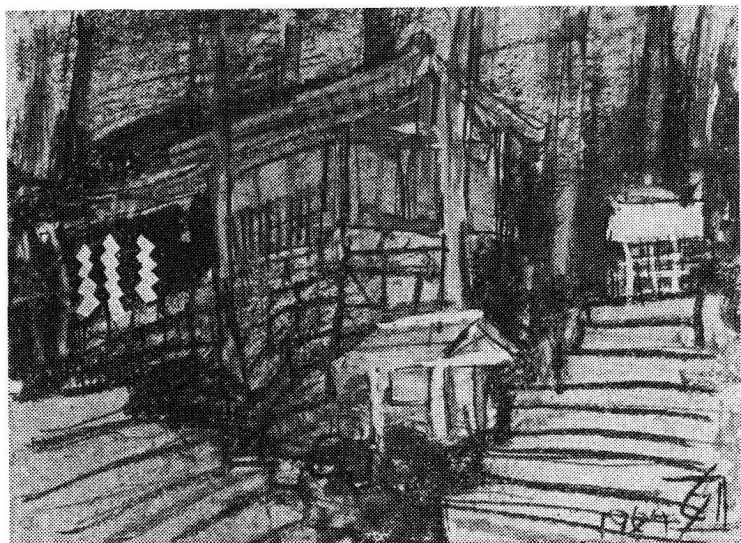
清和天皇にはじかの事歴はない。かつ短命だったから歴世のなかで知名度が高かるべきはずがないのに、しかし異常に高い。理由は、後世にある。その孫にあたる六孫王が臣籍に入って源經基を称し、經基の子の満仲が摂津多田莊に拠って強力な武士団の棟梁になり、そのはるかな後裔である源氏が、

「清和源氏」

を称し、ついに頼朝が鎌倉幕府をおこして日本史を一変させるのである。源氏は諸流あったが、以後、清和源氏がその代表になった。ともかくも武家の世になって清和の名が大いにあらわれた。歴史の可笑味といえる。

はるかな後世になり、三河の徳川家康までが、ある時期まで藤原氏を称していながら、のち清和源氏を公称するようになった。家康は田舎大名のころから、大志があったのであろう。鎌倉の源家も、室町の足利家も清和源氏であることを思ったのにちがいない。

徳川幕府は、その初期において京都の公家勢力をあらゆる手でおさえた。公家法度を設けただけでなく、二代將軍秀忠の娘和子を天皇（諡号・後水尾）の女御とし、やがて中宮として皇后



の宣下<sup>せんげ</sup>をうけさせる。これによって徳川家は外戚となり、宮廷の人事のすみずみまで支配し、さらには和子が生んだ興子内親王を立てて天皇（明正<sup>めいしょう</sup>）とした。

後水尾天皇は、長命した。崩御して後水尾と諡名<sup>おくりな</sup>されたのは、察するに徳川幕府の意思がうごいていたのではあるまいか。

「清和源氏」である徳川家としては、

「後清和」

としたかったにちがいない。しかし思いなおして（？）清和天皇が水尾天皇ともいわれたことでもあり、後水尾とつけたのかと思える。つまりは徳川家が清和源氏の嫡流であるという誇示が、この命名にこもっているような気がする。要するに江戸初期の後水尾天皇自身の生涯においては、嵯峨の奥の水尾の里そのものには縁はなかった。

正午すぎ、家を出た。

午後一時半、桂川の堤防上の道にのぼった。この年（昭和五十九年）は夏・秋に台風がなく、その後も降雨量がすくなかった。桂川の水が瘦せて、中洲がめだっているのにおどろいた。わずかな水に、都鳥（ユリカモメ）がむれていた。

渡月橋の北畔で、写真の佐久間陽三氏を待った。佐久間氏は東京勤務だが、京都の北白川に母堂が住んでおられる。前夜はそこに泊まったはずで、私どもとは嵐山で落ちあうことになっていた。

目の前に、嵐山の翠巒が盛りあがっている。嵐山は、孤峰ではない。

京都市（山城国）の西をふちどる愛宕連山がしだいに低くなってついに人里にまで出てきた最後の山で、連山を踊子たちとすれば、前列でひとり歌っている小柄な歌手といていい。丘としては、双ヶ丘とともに、日本でもっともうつくしい。

私どもは車を、堤防道路の左に片寄せて待った。老松がある。そのかげに建設省の表示板が立っている。